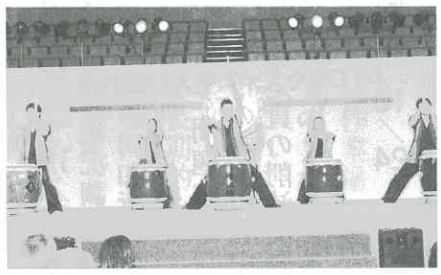
実演、太鼓を張る！太鼓集団「心音」、轟く！

ふれあい人権フェスタ2014

毎年、恒例のふれあい人権フェスタ2014が11月15日、ビッグホエールでひらかれ、のべ7500人が参加した。2日のスケジュールが今年から1日だけになり、参加団体は1日に懸けた展示や踊りなどを披露した。

県連ブースでは、皮革産業にたずさわっていた部落の伝統産業を伝えるべく、太鼓にかかわる展示や湯浅から太鼓集団「心音」の太鼓演奏、映画「ある精肉店のはなし」で出演された貝塚市の北出昭さん、葛城小一郎さん（太鼓師）による太鼓の皮張りを実演した。太鼓の胴に皮をおき、ロープをかけて皮をはる作業は、熟練の太鼓師でないとできない。経験を積んではじめて皮から革へと変化する。また、太鼓の音は牛の鼓動であり、太鼓の音で子どもは眠りにつく。まさに、牛の命をすべていただく職人の想いが凝縮されこめられた太鼓になった。その想いを受け継いで「心音」が「進」「天轟（てんごう）」を披露した。

太鼓の皮をはる北出昭さん、葛城小一郎さん（右）


太鼓集団「心音」のメンバー

■太鼓集団「心音」

湯浅町解放子ども会活動の一環として太鼓教室からスタートし、部落の地場産業であった皮革製品の太鼓をとおして人権啓発の役割を担うグループとして、新たな地域の伝統芸能や文化を築くことを目的に、2005年10月18日、町内秋祭りに和太鼓集団「初音」としてスタート。メンバーが高校を卒業すると、解放子ども会活動とは別に社会人を中心に「心音」として活動をスタートし、地域の伝統文化構築、和太鼓演奏をつうじて人権啓発活動をめざす。

秋の但馬へ

高連協第24回総会

部落解放第25回和歌山県高齢者交流集会及び部落解放和歌山県高齢者連絡協議会第24回総会を11月10日～11日、兵庫県でひらき14支部40人が参加した。

1日目は、篠山・立杭「陶の里」に到着・昼食となった。参加者は、窯焼きの陶器などのお土産を選んだりと楽しく過ごしたあと、夢千代日記で有名な湯村温泉「佳泉郷井づつや」へと移動し、旅館で高連協第24回総会をひらいた。松井辰也・副部長の司会で開会し、解放歌を合唱、宮本睦・部員が水平社宣言を朗読した。つづいて、竹井輝夫・高連協会長から「元気に参加されて久しぶりの再会をうれしく思う。日頃は、各地域での運動ご苦労さまです。みんな私の顔をみたら「元気やなぁ」「達者やなぁ」、車の運転をしていれば「えらいなぁ」と声をかけられる。冗談でも、そういってもらえるように元気でいてなあかん。まだまだ差別は続発している。元気で運動をがんばっていこう」と笑いを交えながらも力強いあいさつがあった。平見良太・書記次長の県連代表あいさつのあと、金本清春・副会長より経過報告を受けた。吉田雪子・副会長の活動方針提案、礒岡和也・部員の総会宣言、清水節子・副会長の閉会あいさつで総会を終えた。

佳泉郷井づつやは、総業300年の老舗旅館で、料理長はテレビ番組の「料理の鉄人」に出演したこともあり、素晴らしい料理に舌鼓を打ちながら、恒例のカラオケや歌にあわせて踊りを披露した。

2日目は、蕎麦で有名な出石で辰鼓楼や明治館、家老屋敷などを見学し、バスで帰途へついた。

宴会場で乾杯する参加者

あいさつする竹井輝夫・会長

文字をとりもどす（4）

「わたしのおいたち」(5)

平井識字学級

■所帯をもって

働いていたお金は、すべて義母に渡していました。子供にもお金がかかるのに、どれだけ働いても義母から決まった少しのお金しかもらえず大変でした。同居生活から17年たったころ、つれあいの親戚のおじさんに「娘も中学校やし所帯を持たせてやれ」とお義母さんに言ってくれ、やっと働いた分のお金を貰えるようになりました。その時おじさんに、せめてタンスぐらいは買うよう言われ立派な物は買えないので知り合いの店で傷物の安いタンスを譲ってもらい今もまだ使っています。

■娘のこと

私は、学校にもほとんど行けなかったので、一人娘には習い事に通わせたり、裁縫、料理など何でもできるように育てました。娘も大きくなり、結婚することになった時は、たくさんの物をもたせて荷入れさせました。私が結婚した時はなにももたず身ひとつだったので、自分と同じ思いをさせたくなかったのです。

■はじめての自分の時間

つれあいの両親や義弟を見送り、子どもも自立するようになり、やっと自分の時間がもてると思った矢先、つれあいも亡くしてしまい一年ほど塞ぎこんでいた時に義姉が、つれあいも通っていた老人会のカラオケに行くよう勧めてくれました。

（次号につづく）

連載（4）

今、伝えなければならないこと

（県連再建40年⑤）

再生へ…

1972年以降、県内の部落解放運動は、組織と運動の再生に向け加速度をましていた。74年に「西川県議差別事件40年記念集会」がひらかれ、これまでの運動のあり方と「馬頭県議差別事件」が総括された。

さて、1974年3月にひらかれた「第29回全国大会」で、事前の申合せにもかかわらず、和歌山県連の代議員が、京都府連と中央本部を誹謗中傷する発言をおこなったため会場が騒然となるということがおきた。この状況を「あかはた」が『全国大会の席上、和歌山県連の代議員を取り囲み、殴る蹴るの暴行を…』という事実無根の記事を報じた。このことに関わって、県連は、京都府連と中央本部に謝罪し、アカハタに訂正と謝罪を申し入れるということになったが、実際は放置したままであった。

また、県連執行部は参議院選挙での組織内候補「松本英一」の選挙をサボタージュして、代わって共産党の候補者を押し付けてきた。しかし、県連の意図に反して、前回の倍の得票を得る結果になった。

さらに「橋のない川・第2部」上映に関わって、執行部はこの差別映画の上映をすすめていた。県連執行部は、分裂組織・正常化連（1970年）に露骨に追従していった。

こうした状況のなか、6月にひらかれた県連執行委員会は、紛糾することになる。①全国大会でのアカハタの報道記事②参議院選挙③「橋のない川・第2部」上映の3点について、本部方針や中央本部との約束を反故にし、狭山事件にとりくまないが、差別映画の上映を公然とすすめる県連に、批判が続出した。結局、結論がでないまま閉会した。また、7月にも執行委員会を開催。先の執行委員会の議題が引き続き議論されさらに追い詰められていった。

こうした状況で、三役の一人から「どないでもせえ」と追い詰められ開き直るという一幕もあった。

8月7日、全支部の代表が参加して、県委員会が開催された。

しかし、先の2回の執行委員会で議論されたまったく提案されなかった。かわって、県連書記長から突然「書記長私案」なるものが提案された。それは「第19回定期大会運動方針」であり、さらに、日時、会場もすでに決めており、状況としては通告のようなありさまであった。こうしたやり方は、極めて非民主的であり、執行委員会の決定を経ないで大会日程や運動方針の提案は、組織違反行為である。これにたいし、執行部の一部と杭ノ瀬、湯浅、新宮、平井、山口をはじめとする11支部の代表はいったん退席し、あらためて①方針草案の起草にあたって、執行委員会の議を経ていない、②方針内容が本部方針に反している、③大会の延期、④方針の討議の4点について県委員会に申し入れた。しかし、これを無視し、県連執行部は「第19回大会」を一方的に強行しようと準備をすすめていった。

事態を重くみた中央本部は、数度にわたって文書で話合いと大会の延期を申し入れるが拒否、かわって「アカハタ」に「第19回」の開催と部落解放同盟への誹謗中傷記事がのせられた。

（以下、次号へ）